

イチヨウの木が、すっかり葉っぱはぐもこもこになりました。昨日 蕾だった
アンネのバラが、今日は魅惑の花を開いて見せてくれます。
子どもたちが一日へ、一回への体験を通して変化していきます。

“^{いのち}生命ある”とは、変化・変容していくことなのですね。

毎年この季節になると、様々な成長やメタモルフォーゼする姿を目の当りにして、“変化する
こと”を思いめぐらす機会を与えられます。

朝泣いていた子が涙なしで手を振りながらお母さんから離れられるのも変化でしょう。
できなかった逆上がりができるようになるのも、うれしい変化のひとつです。

弟や妹ができて、ちゅぴり甘えん坊になったり泣き虫になることも、通過せざるを
得ないその時の姿なのでしょう。

青、黄、赤、それぞれの新しいバッチを付けて、それぞれらしい表情をするのも変化に
違いありません。関係性の中で動き方が変わってくるのも興味深いことです。

そして、目に見える変化の背後に、ことによると、“ちょっと変わっていない”、“動きが
ないように見える”ときに、変容に向けて内なる準備をしていることも——外からなかなか
気づきにくいだけで——大きく変化していることなのだと思います。

一見同じことをしているようで、実は螺旋を描くように質的に変化していることも多い
のでしょう。

もしかしら目に見えない変化に向けての充電の時や、停滞や退行しているように
さえ見えながら内なる質的な変化をしている時間が、とてもとても大切なものかもしれません。

『人生に必要な智慧は すべて 幼稚園の砂場で学んだ』という本があります。さきやか
に見えても子どもたちの今日の出来事が、30年後・50年後のひらめきや役割……
に変化するかもしれません。

子どもたちの（もちろん私たちのもですが）、ひとつひとつのドラマの中には、そのくらい
意味深いものが 散りばめられているのではないのでしょうか。

5月がやってきます。

目に見える変化にも、変化へとつながるたくさんの^{いのち}生命ある種にも、感じ、受けとめ、
よろこび合いながら、過していきたいと思えます。

きっとたくさんのご・ものが、生まれてくることでしょう！

園長 弁光 泰雄

* 最近 何年も前に出された ある機関誌を読んでいたら、30歳過ぎくらいの
担任をしていた頃に書いた一文を見つけました。

かつての自分との再会は、未来への仕切り直しとして新たな生命を与えられるような
気がしました。変化へと自分を誘う衝動やエネルギーは、脈々とかつての自分
からも送り届けられているのだと思いました。

掲載させていただきました。どうぞご一読下さい。



「おとうちゃん目の中に私がいる！」

升光 泰雄

僕の仕事と生活の場は、幼稚園です。だから小さな子どもたちが放つ元気な気分がいつも取り巻かれています。休みの日など、子どもたちが残っていた楽しい空気をかみしめながら、我が家のちびと陽だまりで遊んでいたりと、小さかった時味わっていたものが、ふとよみがえってきたりします。

お陽さまの光と熱と、土の匂いと水と空気の肌ざわりと……共に生きる「人」の存在感から、自分を支え育ててくれる大切な力が働いていることを思い出したりするのは、小さな子どものとき、それらの力を言葉で表せなかったとしても、実感していたのではないのでしょうか。記憶の周辺を漂っているものをたぐり寄せると、どうもそんなふうに思えてしょうがありません。

小さな子どもたちは、体全体で周囲のものを見ています。「見る」ことは同時に「夢見る」ことで、子どもはその存在全体としっかり結びついている感じなのです。子どもは目の前にある(いる)ものを、そのまま共感をもって受けとめるので、それを通して自分自身の存在感をも強め、自らを育てていく感じなのです。そして見られるものも、どんぐりまなこがあまりに眩しく光っているので、その光にちょっぴり恥じらいながらも、見つめてくれる他者をうれしく感じて、自分の成長に力づけを受けているのです。

ついこのあいだ、「おとうちゃん(僕のことをそう呼ぶ子どもが何人かいます)目の中に私がいる！」と、女の子が僕の膝に顔をつき合わせるようにしてのっけながら叫びました。僕も思わず、その子の瞳の中に自分の姿をさがしました。(そして僕も昔そうやって誰かの目の中に自分がいるのをみつけて、びっくりしたことを思い出しました。)その後、さっそくクラスの子どもたちと円く坐って、僕の瞳に一人一人の子どもが住んでいて、僕が一人一人の中に住んでいることを確かめて、何だかほのぼのとうれしくなってしまったのです。

ほんとうに「見る」ということは、他者と出会い共に生きていくことなのかもしれません。「する」ことに夢中になりがちな日常。そこに「いて」あるがまま一つ一つ、一人一人「見る」ことの大切さを、いま一度受けとめかえたいと……陽だまりの中で感

じました。一人一人の子どもをみつめながら、共に成長し合う育みの場を模索したいと思います。

さいごに、今年担任しているクラスの断片をご紹介します。

(幼稚園通信より)

最高の喜びの瞳で、僕の方に近づいてくる子ども。うれしい心を体いっぱい伝えて走りくる。

僕は瞬間、その子のほとんどを理解していない自分に気づかされる。不思議をいっぱい心にわきたたせている子どもを、自分はいったいどれだけ受けとめているのだろうか。ちっぽけな自分の心に気づいたとき、「あるがままに受けとめよう」と、何か熱いものが流れ出す。

ちようちよう組のかずき君は、かなりの難聴で、僕たちよりも周りの音がずっとずっと聴きづらい。僕は、天性の明るさをもつて、好奇心に満ち満ちているかずき君の聴こうとする意志をどれだけ共有できるのか...

ちようちよう組のお祈りは、すこぶるゆっくりになった。

かずき君の名前は、クラスみんなと一緒に呼んでくれる。

替え歌が大好きな子どもたちも、みんなでうたうときには、かずき君の耳がごちゃごちゃにならないように協力してくれる。

大切なことが一つ一つ見えてくる。大切な心があらわれてくる。

一所懸命のかずき君が何と愛しいことか。そして一緒に考え、一緒に進もうとする一人一人の子どもが何と愛しいことか。



より添うこと...は、付き添うことでは必ずしもなく...
その子その子を、その子として理解すること！なのですね。